第２回
紀の川流域委員会
H13. 7. 18

参考資料－２

各委員からの紀の川の思い入れ集

委員名	安　藤　精　一

美しく、ゆたかな自然と、すばらしい歴史を生みだした紀の川を愛する。

大谷古墳、岩橋千塚古墳群にみる古代文化、中世の荘園の発達、近世では特に産業経済とともに技術水準の高さに注目し、これらが現在の紀の川とどのようにかかわっているかに興味がある。

特に大畑才蔵の『地方の聞書』や土木工事の先進性、紀州流土木工法で、名をはせた井沢弥惣兵衛が関東の見沼代用水で、パナマ運河よりも１８３年も前に閘門式運河を完成させた高度な技術がどのような姿で受けつがれたかを明らかにしたい。

委員名	今中佳春

私は、紀の川の上流にあたります奈良県は吉野川のほとりで生れ育った者です。子供の頃は吉野川の水量も豊富で川上よりの木材を運ぶ筏流しや川遊びの屋形船が往き来し、よく屋形船の後について泳いだりもした思い出があります。

しかし、台風での洪水の時は大きな木造の橋や家が流されているのを見るにつけ洪水の怖さ、恐ろしさが幼いながらも脳裏に焼付いてあります。このような川でも水辺に関わる住民にとっては生活と切り離せない一部となっています。

これからの河川の役割は、治水・利水にとどまらず人に優しい潤いのある水辺の空間や生物の多様な環境保全、或いは地域の特性を活かした個性ある川づくりが必要かと思います。

また、洪水対策や渇水対策には自然の地形を利用する他に、河川の各地域ごとに河川流量や流出土砂の検出を、これからの時代に対応した電子技術や電子制御、赤外線技術の応用等によりダムや堰の水門制御その他に瞬時に対処できる方策を今迄以上に多用化する事が水の効率的利用や自然破壊を少しでも軽減する事にもつながります。

人は自然の中に生かされている事を思い、人と自然の調和や共生ができるよう紀の川流域に住む地域住民の一人として、より良い川づくりを皆様方と共に考えてゆきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いします。

紀ノ川への思い

岩畑　正行です。

私は和歌山市内在住です。今日までの３分２は、公私にわたり和歌山において生活してまいりました。

私の生活において、紀ノ川はいつもひとつの風景として変わらぬ郷土のシンボルと認識して見つめてきました。また、紀ノ川の支流である紀伊丹生川には、特に思い出深い哀愁を持って接してきたように思います。

年代的には、１０歳前後の玉川峡でのキャンプ、これは当時、毎年恒例の行事になっていました。

３０歳代には、郷土の風景写真の撮影、特に高野竜神国定公園を頂点とした山岳写真を中心にしたものです。

５０歳になって、玉川峡にダムが出来ると聞き、懐かしさも手伝って何度か行く機会を持ちました。

年代的に変転しながら違った感じ方での紀ノ川に対する思いは、自分ながら紀ノ川の風景を大事に感じていたのだと痛感する今日です。

１８日の委員会において、「紀ノ川への思い」一言については、このへんのところを話してみたいと思っています。

委員名	上本 博康

私は、6歳まで橋本市に住んでいました。その当時の思い出として、毎年8月に紀ノ川の河川敷で実施されていた花火大会（紀ノ川祭）を楽しみにしており、その後も何回か紀の川祭を見に行ったものです。

平成12年4月に和歌山市水道局工務部水質試験室に配属され、現在紀の川の水質調査を行なっております。